



万葉集と安中

現在開催中の企画展「文学・芸術の中の安中」で取り上げている、安中市にゆかりのある作品を紹介します。

「万葉集」は奈良時代までの約4,500首の歌を集めた日本最古の歌集です。原文は一見漢文のように見えますが、漢字の意味は関係なく「音」だけを仮名の発音にあてはめた「万葉仮名」で書かれており、天皇や貴族、兵士、農民などさまざまな身分の人々が詠んだ作品を収録しています。

安中市の地名が登場する歌は「東歌」と、九州に派遣された兵士(防人)が作った「防人等歌」に確認できます。

令和3年度 文化財愛護ポスター



優秀賞

松井田東中学校(2年)

中澤 春陽さん

(学校名、学年は当時のものです)

当時は都(奈良)から上野(群馬)を経て東北へ抜ける幹線道路の「東山道」があり、碓氷峠はその道筋に位置しています。二首とも別れの歌で碓氷峠(当時の所在地は諸説ある)を旅立ちに関わる場所として歌っています。今のように気軽に移動できなかった時代、峠を越えての別れは永遠の別離になり得ました。これらの歌からは、別れを惜しむ気持ちが見えます。

春季企画展「文学・芸術の中の安中」

展示期間 7月4日(月)まで

展示場所 ふるさと学習館

市民ギャラリー(観覧無料)

5月3日(火)・祝は開館しています

「東歌」

比能具禮介 宇須比之夜麻乎 古由流日波 勢奈能我素何母 佐夜介布良思都

訳 日暮れ時に碓氷の山を越えた日には夫が袖をはつきりふるのも見えた。

「防人等歌」

比奈久母理 宇須比乃佐可乎 古延志太介 伊毛賀古比之久 和須良延奴加母

訳 薄曇りの日に碓氷の坂を越えたとき出がけに妻が辛がっていたのが忘れられない。

おくれぎきはるなのうめがが 後開榛名梅香

連載 第1回

作：三遊亭円朝(1839～1900) 編集：学習の森
※学習の森で紹介のために編集したもので、原文とは異なります

幕末から明治にかけて活躍した落語家の三遊亭円朝が安中を舞台として創作した長編作品「後開榛名梅香」をわかりやすく編集し、その序盤を連載形式でご紹介します。創作の際、円朝は自らの足で安中を訪れ、作中に実際の地名やリアルな景色を盛り込みました。その綿密な描写は、多くの人々に登場人物が実在すると思ひ込ませるほどでした。原文は国立国会図書館のデジタルアーカイブに掲載されていますので、興味のあるかたはぜひご覧ください。

主従の出会い(1)

時は文化・文政、上州安中に草三郎というまんじゅう屋がおりました。これは孝行者で心優しい草三郎が恩人のために盗みを働き、その因果で悪党として果て行くという、波乱に満ちた人生のお話でございます。

一息には語れぬ長物語でございますから、まずは恩人となる恒川半三郎

と草三郎、二人の出会いをお目につけて存じます。

常陸土屋藩士恒川半六の嫡男恒川半三郎は、剣術の師木曾川成瀬に請われて信州岩田村を訪れていた。病床にあつた成瀬は柳生流の奥義の伝書を恒川に託すと、急変して帰らぬ人となった。

葬儀ののち、恒川は江戸屋敷へ戻るため、従者の藤蔵を連れて信州を発った。途中立ち寄った茶屋で休んでいると、十五、六のいかにも貧乏らしい小僧が近寄ってきた。「旦那さま、どうかまんじゅうを買ってください。父が病を患い、わたくしが稼いだお金でなんとか暮らしております。どうかお慈悲と思ってお買いなすってくださいまし」

「藤蔵、買ってやろうではないか」

そう言われたもののこんなものを主人に食べさせられぬと藤蔵がまごついていると、茶屋の店主が飛び出してきた。(つづく)

問合せ▶安中市学習の森 ふるさと学習館 午前9時～午後5時(入館・ミュージアムショップは午後4時30分まで)
安中市上間仁田951 Tel. 027-382-7622 mail: furusato@city.annaka.lg.jp
【5月の休館日】5/6(金)、5/10(火)～5/13(金)、5/17(火)、5/24(火)、5/31(火)